令和6年度

結城市制施行 70 周年

市民情報センター・ゆうき図書館開館 20 周年記念

第１７回新川和江賞

～未来をひらく詩のコンクール～

表　彰　式

日　時：令和７年２月９日（日）午後２時
場　所：石島建設プラネットホール・ゆうき図書館　多目的ホール
主　催：結城市・結城市教育委員会
　　（公財）結城市文化・スポーツ振興事業団

ごあいさつ

結城市は、歴史と文化のまちです。江戸時代の俳人・与謝蕪村は、当地の俳人・砂岡雁宕のもとに身を寄せ、交遊し、結城を詠んだ俳句などを多数残しました。また結城朝光公以来、結城家で代々保護育成された紬産業は、平成２２年にユネスコ無形文化遺産に登録されました。

この歴史と文化を継承していくのは、未来を担う子どもたちです。そうした結城の子どもたちの才能を発掘し、伸ばしていきたいという、名誉市民であり、ゆうき図書館の名誉館長でもある詩人・新川和江さんの思いが、結城市民情報センター・ゆうき図書館が開館５周年を迎えた平成２０年度に、「新川和江賞～未来をひらく詩のコンクール～」という形で具現化されました。

このコンクールは、今年で第１７回を迎え、２，１０８点のご応募をいただきました。これまでの合計は、３２，８７５点に及び、毎年素晴らしい作品が数多く生まれました。詩の創作活動を通じて、本市の文芸振興を図るとともに、積極的に未来に向かう創造性豊かな青少年の育成に貢献してまいりました。

平成２４年の第４回新川和江賞表彰式の折りには、新川さんから、ゆいゆいぱーく入口前に石像「野の花」のご寄贈がありました。「結城のすべての子どもたちに対して、やさしい温かさで見守り、いつでもいつまでも思い続けていきたい」との気持ちと願いが込められ、結城市民情報センター・ゆうき図書館を向いて設置されています。新川さんは、昨年の夏にお亡くなりになりましたが、「野の花」のように、皆様のことを温かく見守ってくださっているでしょう。

本市は、子どもたちの個性と無限の可能性を開花させる教育を推進するとともに、地域資源を活用した魅力と活力あるまちづくりを進めてまいります。結城の地でのびのびと育った子どもたちが、大人になっても、結城で過ごした日々を誇りに思う。そうあってほしいと願っております。

結びに、皆様が詩の創作活動を通じて、個性豊かな創造力を育み、豊かな心で毎日を過ごされますことを願い、ごあいさつといたします。

令和７年２月９日

結城市長　小林　栄

ごあいさつ

結城市の小学生、中学生、高校生の皆様。今年度も「第１７回新川和江賞―未来をひらく詩のコンクール」に2,１０８篇ものすばらしい詩を応募してくださいましてありがとうございました。そこから事前選考で、新川和江先生を中心とする詩の集い「センダンの木の集い」の詩人の関和代さん、山中和江さんが４９５篇を選んで下さいました。どの作品も、毎日親しんでいる身近な自然や家庭生活、学校生活で心にひびいた出来事を、感じたままに自分の言葉で素直に表現した素晴らしい作品ばかりで、選ぶのに苦労したと話していました。私も、選ばれたそれらの作品を、心を集中させくり返し読みまして、新川和江賞、優秀賞、優良賞を選びました。受賞者の皆様、ご受賞おめでとうございます。

皆さんの作品を心静かに読んでいますと、言葉を通して、皆さんの楽しそうな声や息づかいが聞こえてきます。私は、それを聞きながら幸せな気分になります。詩を読む楽しみはそこにあるのですね。皆さんといっしょに生きているといった感動です。よい詩をたくさん読ませてくださいましてありがとう。

ここで悲しいお知らせをしなければなりません。新川和江先生が、昨年８月にお亡くなりになりました。いつも故郷の皆さんを心にとめていて下さいました。皆さんの詩を読みながら、こんな素晴らしい詩を書けるんだと喜んでいました。最後に電話でお話したのは、去年の表彰式の夜で、皆さんの詩を読んで、大変誉めて下さいました。

そして、こんなによい詩が書けるのに、成人してから、「先生、私は最近こういう詩を書きましたよ、と見せてくれる人がまだいないのがとても淋しいです。一人でも二人でもいいのにね」と言っていました。私もそう思います。先生は、皆さんの未来を見つめていらしたのですね。先生から、大切な宿題を頂きました。皆さん。天国の新川和江先生に届くように、これからも詩を書きつづけましょう。

最後になりましたが、児童、生徒たちを詩の創作に熱心にお導き下さっている先生方、保護者の皆さま、この豊かな事業を推進されている結城市長をはじめ関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

令和７年２月９日

選考委員長　武子（たけし）　和幸（かずゆき）

次　　第

日時　　令和７年2月９日(日)
　　午後2時
場所　　石島建設プラネットホール・
　　ゆうき図書館
　　３Ｆ多目的ホール

●表彰式

１　開式のことば

２　主催者あいさつ

３　来賓あいさつ

４　表彰

５　第１７回受賞作品朗読

優秀賞
新川和江賞

６　選考委員長による講評

７　閉式のことば

●受 賞 者 氏 名

☆新川和江賞（最優秀賞）

かみなりのよるは	江川北小学校	１年	岡田（おかだ） 葵（あおい）

☆優　秀　賞

わたしのあたたかい	結城小学校	２年	田中（たなか） 奏音（ことね）
ことば	城南小学校	３年	古澤（ふるさわ） 太生（だい）
お母さんのおみそしる	城西小学校	３年	稲葉（いなば） 波華（なみか）
ふうりん	結城西小学校	４年	鈴木（すずき） 壱織（いおり）
ぼくのお父さん	山川小学校	４年	永井（ながい） 創来（そら）
熱帯魚	絹川小学校	５年	レーホアン　フー
夏の海ほたる	江川南小学校	５年	川面（かわつら） 一颯（いぶき）
気持ちは何色？	結城小学校	６年	若林（わかばやし） 葵陽（あおい）
青い雨	上山川小学校	６年	佐藤（さとう） りく
夏の朝	結城南中学校	２年	河合（かわい） 音杷（おとは）
「夏の教室」	結城中学校	３年	佐藤（さとう） 理生（りお）
日常	結城中学校	３年	塚田（つかだ） 来留美（くるみ）
タンポポ香水になってみたい	結城東中学校	３年	ヤスミン　シタンガン
再開	結城第二高等学校	１年	永盛（ながもり） 愛音（あいね）

☆優　良　賞

なつのおはな

結城西小学校　１年　平山（ひらやま）　新菜（にいな）

すいかがわれた

城南小学校　１年　柏瀬（かしわせ）　将吾（しょうご）

おならくん

絹川小学校　２年　小松（こまつ）　咲輝（さき）

ぎっくりごしになったまま

山川小学校　２年　渡邊（わたなべ）　羽奏（わかな）

ないしょは、ないしょ

城西小学校　２年　上野（うえの）　翔大（しょうた）

サンダル

上山川小学校　３年　箱守（はこもり）　結仁（ゆいと）

写真にうつっていたのは

結城西小学校　３年　大野（おおの）　月冴（つかさ）

オレの毎日

結城小学校　４年　古川（ふるかわ）　颯祐（そうすけ）

ひまわりのおいのり

結城小学校　４年　吉田（よしだ）　悠真（はるま）

みそおむすび

江川北小学校　４年　岩﨑（いわさき）　匠（たくみ）

ぼくの大好きなご飯

上山川小学校　４年　岩田（いわた）　大河（たいが）

パソコンってすごいな

江川北小学校　５年　稲葉（いなば）　翔海（しょうま）

フリースロー

江川南小学校　５年　一ツ木（ひとつぎ）　琉生（るい）

地球温だん化

山川小学校　５年　矢口（やぐち）　紗希（さき）

太陽の体調管理

城西小学校　５年　稲葉（いなば）　琥珀（こはく）

ミニが教えてくれたこと

城西小学校　５年　坂本（さかもと）　悠真（ゆま）

☆優　良　賞

夏の袋井に

結城中学校　１年　山﨑（やまざき）　優（ゆう）

ツバメの巣

結城南中学校　１年　生沼（おいぬま）　友羽（ゆうは）

ボタン

古河中等教育学校　１年　青島（あおしま）　優花（ゆうか）

四つ葉、それは私のあこがれの花

結城中学校　２年　工藤（くどう）　愛梨（あいり）

中途半端

結城中学校　２年　武田（たけだ）　大和（やまと）

人生で最高なプレゼント

結城南中学校　２年　大島（おおしま）　彩可（あやか）

気がする

結城東中学校　２年　飯田（いいだ）　瑠鈴（るり）

影

結城東中学校　２年　渡邉（わたなべ）　更咲（さらさ）

花壇

結城南中学校　３年　矢口（やぐち）　成也（せいや）

「普通」ってなんだろう

結城東中学校　３年　塩野（しおの）　心音（しおん）

青空の無限回廊

結城第二高等学校　１年　萩原（はぎわら）　煌天（そら）

ワガママな花束

成美学園小山校　１年　陣野（じんの）　未徠（みく）

本当の意味

結城第二高等学校　２年　稲見（いなみ）　日向（ひゅうが）

ことばはいつ　詩となるのであろう
猿に噛みくだかれた木の実が
むろの中で年月を経て酒となるように
夜ふけに草をしめらせた露が
あけがた葉末で玉となるように

新川和江

●受賞作品

新川和江賞（最優秀賞）

かみなりのよるは

江川北小学校　一年　岡田　葵

かみなりのよるに
おかあさんへんなこといいだした

へやをまっくらにして
まどぎわにしゅうごうして
かみなりのおと　きいてみようって
かみなりのいろ　なにいろかなって

おふとんかぶって　おへそをかくして
じゅんびばんたん　かみなりかんさつ

バリバリ　ゴロゴロ　ドッスーン　ピカピカ
キリキリ　ゴーゴー　ガタガタ　パリーン
かみなりのおと　ちかくてこわい
たいこじゃないの？　えほんとちがう

むらさき　みずいろ　ピンクにオレンジ
きんいろ　ぎんいろ　ちゃいろにしろも
かみなりのいろ　うす目でみたよ
きいろじゃないの？　はじめてしった！

おかあさんをとりあって
きょうだい３人　おしくらまんじゅう
あせびっしょりで　かんさつしゅうりょう

かみなりのよるは
くっついてもくっついても
ちょっとまってっていわれない
わたしたちだけのおかあさんになる

ちゃんとじゅんばんまもるから
わたしのばんになったら
わたしだけのおかあさんになって

短評　新川和江賞　「かみなりのよるは」

へやをまっくらにしてかみなりかんさつ。なんてすてきなおかあさん。えほんとはちがういろいろなおとやいろをはっけんしてびっくり。おへそをかくしながら、うす目でみたんだね。ほんとうにかわいい。かんさつしたことをていねいに、こまかくかいているので、葵さんたちの、いきづかいまできこえてくるようですよ。さらにすばらしいのは、みんなでのおしくらまんじゅう。いきいきとかかれていて、ほんとうにしあわせなかぞく。じゅんばんまって、おかあさんひとりじめなんて、いいなー。

優秀賞

わたしのあたたかい

結城小学校　二年　田中　奏音

わたしは　あたたかいものがすき
からだがあたたかくなるものは
ふわふわの雲みたいなまっ白のふとん
つめたい足をみんなでいれるこたつ
ストーブでカリカリにやいたおもち
いっぱいあるいた日のあっついおふろ
ねるときにのむチョコみたいなココア
こころがあたたかくなるものは
まい日ぎゅっとするいぬのぬいぐるみ
毛がもふもふのねこのおなか
おてつだいをしたときの「ありがとう」の
ことば
ゆめの中でお花のくににいくこと
じいじとばあばに「かわいいね」といわれる
かみの毛
空の上のねこのことをおもいだすとき
こころの中がほわほわっと
あたたかくなる

わたしのあたたかいは
たくさんたくさんある
さみしいときかなしいときに
あたたかいものを考えると
がんばろうっておもう
きょうもわたしのあたたかい
ふえるといいな

短評　優秀賞「わたしのあたたかい」

あたたかいものが、ひとつひとつつみかさなっていくうちに、詩ぜんたいが、ぽかぽかあたたかくなってきて、よんでいるわたしたちの心もあたたかくなりました。体にかんじるあたたかさは、心のあたたかさになって、ひとや動物や自然にやさしくして、あいするようになるのですね。奏音さんのように、がんばろうとおもうようになるのですね。詩をよんで、それにきづきました。

優秀賞

ことば

城南小学校　三年　古澤　太生

「今日、あの子をむししよう」
と男の子が言った
「おはよう」
とその子がやってきた
みんなだまって下を向いていた
その子はしばらくそこにいて　何も言わずに
自分のせきについた
　休み時間になった
「だいじょうぶ？」
ひとりの子がそっとその子に聞いた
その子は少しわらって下を向いた
昼休みもその子はずっとひとりのままだった
　下校の時間になった
「なんで話しているんだよ」
むししようと言った男の子の声がした
「友だちがここにいるから話をしているんだ」
とその子に話しかけた子が言った
その子は顔を上げてうれしそうにわらった

ことばはこわい
ことばで動く
ことばはやさしい
ことばでたすかる
ことばでつたわる
　ことばは大切
ことばにはすごい力がある
今日の、今のぼくのことばにはどんな力があるのだろう

短評　優秀賞「ことば」

　むししようときめてみんなでむしした子に、ひとりの子が、友だちだからと声をかけた。その勇気あるひと言でその子はすくわれましたね。そのとき、太生さんは、ことばに、こわさ、やさしさ、なにかをつたえ、人をうごかす力、人をすくう力があることを知り、太生さんは、今のぼくはどんなことばの力をつかっているのだろうと自分をふりかえります。もちろんやさしく勇気ある力のことばだと信じていますよ。

優秀賞

お母さんのおみそしる

城西小学校　三年　稲葉　波華

毎日お母さんが作ってくれる
おみそしるはおいしい
わたしが朝おきるまでに
何のおみそしるが
できてるか毎日たのしみ
だいこんほうれん草もやし玉ねぎ
にらきゃべつわかめあぶらあげ
たくさんのやさいをいれてくれる
今日のおみそしるは何かな
朝おきてきがえて朝ごはんだぁ
たまごとわかめと玉ねぎとにらが
入っている
一番お気に入りのおみそしる
お母さんはわたしがすきな
おみそしるをしってくれているので
たまご入りにしてくれる
ほかのやさいの時はたまに
ごはんにかけて食べてしまうけど
お母さんのおみそしるはおいしい
朝はおきられなくて
作れないけど
こんどわたしが
おいしいおみそしるを
つくってあげるね

短評　優秀賞「お母さんのおみそしる」

おみそしるのやさいのなまえがつづけざまに出てきて、おいしそうですね。ゆげを立てているかおりのよいおみそしるが、目にうかんできます。波華さんのすきなものをよく知っているんだね。食事は、あいじょうが作るんだ。お母さんが、朝おきられないときは、波華さんが作ってあげるってすばらしいな。こうしてお母さんの味が、あいじょうとともに、波華さんの子どもたちにつたえられていくんだね。すばらしいことだ。

優秀賞

ふうりん

結城西小学校　四年　鈴木　壱織

チリンチリン　自転車かな
チリンチリン　いい音だな
チリリンリン　体にひびく
チリリンリン　きれいな音
チリンリリン　すきとおった丸い
チリンリリン　ふうりんだ
チリチリリン　風がそよそよ
チリチリリン　ふいている
チリンチリン　気持ちがいいな
チリン　風りんはいいな
チリン　夏の風をたくさんあびて
チリン　という音を出せる
風りんの音を聞いていると
だんだんすずしくなってきた

短評　優秀賞「ふうりん」

かたかなのチリンチリンという音は、風りんの音。風の強さや向きによって、いろいろなる音がかわってくるのを、じょうずにあらわしていますね。風にふかれてきれいな音をきいている壱織さんのすずしそうな顔が目に浮かんできます。詩の中から美しい風りんの音があふれ出てくるようですよ。

優秀賞

ぼくのお父さん

山川小学校　四年　永井　創来

「オヤスライ、コゴーヘイ。」
「コスライ、コスライ。」
ぼくのお父さんはクレーンオペレーター。
合図と共にお父さんがそうさする大きなクレーンが空高くのびていく。お父さんの目は家にいる時のやさしい目とちがってしんけんな目をしている。お父さんに、「お仕事の時の目がしんけんだったね。」と言うとお父さんは「命がけのお仕事なんだよ。」と言った。
そのクレーンをそうさする手でぼくの頭をなでてくれるお父さんの手は大きくてかっこよかった。
ぼくが小さいころにたくさんだっこしてくれた手、キャッチボールをしてくれる手、その手で一生けんめいお仕事をしてくれている。
いつもありがとう
ぼくは、お父さんの手が大好きだ。

短評　優秀賞「ぼくのお父さん」

合図の声と空高く伸びていくクレーン。そうさするお父さんのしんけんな目。それだけでお父さんの命がけのお仕事の様子がよく伝わってきますよ。それを見ている創来さんの緊張している姿も目に見えるようですよ。それだからこそ頭をやさしくなでてくれて、だっこしてくれ、遊んでくれる手の優しさが、こころに深く感じられるのですね。お父さんは、創来さんのヒーローだ。

優秀賞

熱帯魚

絹川小学校　五年　レーホアン　フー

ひまわりの教室に
熱帯魚がやってきた
グッピーにネオンテトラにコリドラス
美しく青い光を放つネオンテトラに
ネオンと名前をつけた
いつも水そうの底のほうにいて
みんなの食べのこしを食べてくれる
コリドラスにはルンバと名前をつけた
水色や黄色　オレンジ色など
色とりどりのグッピーは
たくさんいすぎてどれだかわからない
水そうの前に立つと
熱帯魚たちは一斉に集まってくる
エサがほしいのかな
水そうの中を元気に泳ぎまわる熱帯魚たち
ずっと元気でいてね

短評　優秀賞「熱帯魚」

〈ひまわりの教室〉。素敵だな。太陽がさんさんと降りそそいでいる感じ。水そうが、すき通った南の海だ。そこに〈熱帯魚〉があらわれる。さまざまなカタカナのことばの熱帯魚。名前をつけてもらった一匹は〈ネオン〉でキラキラ。一匹は〈ルンバ〉をおどる。色とりどりのグッピーたちがどっと押しよせ、もう目がくらくらまわりそう。楽しいね。レーホアンフーさんも美しい熱帯魚になって泳いでいるのかな。

優秀賞

夏の海ほたる

江川南小学校　五年　川面　一颯

7月の静岡南伊豆の弓ヶ浜。
沖縄の海のように、海の中がすけてみえるほど透明な海。
太陽の光がふりそそぐ昼間は、波打ちぎわからも熱帯魚のようなお魚たちが楽しく泳いでいるのが見える。
今夜は、昼間のお魚ダンスではない。
海辺がうす暗くなるころに、浜辺にはたくさんの人が集まる。
　水平線のむこうに、太陽がしずみあたりはまっ暗になり聞こえるのは波の音。
すると、「わー。青い」。というたくさんの声が聞こえはじめた。
まっ暗なやみの中、波打ちぎわを青い美しい光がよせては消える。
まるで、宇宙にいるような青白く発光して輝く海が現れる。
　「海ほたる」。満天の星空に、青く光輝くその様子は、まるで夜の海のぶとう会のようで
すこし沖ではボラととび魚がジャンプしている。
みんな声を出すこともなく、海のぶとう会とよせては返していく波の音を聞きながら。
きっと海の中でもぶとう会をしているのかな？

短評　優秀賞「夏の海ほたる」

　この光景は、きっと大人になっても忘れることはないでしょう。読む人の関心を引きつけるように、次々書いていく書き方は素晴らしい。真っくらやみの波打ちぎわに青く光輝く海ほたるの出現は、まさに最高の場面。声も出ないほど美しい。みごとです。沖では、ボラととび魚がジャンプして、役者がそろいましたね。わくわくしましたよ。

優秀賞

気持ちは何色？

結城小学校　六年　若林　葵陽

空を見上げて　お日さまから元気をもらえる
日差しの色　黄色
ドッジボールをしたり　ピアノをひいたり
ウキウキして心がはずむ色

息をむねいっぱいに吸いこんで
深呼吸すると
すっと通りぬけていく緑色
なんだかほっとする　やさしいそよ風

赤い炎でやる気がいっぱい
でも気をつけて
燃えすぎるとけんかしたりイライラするから
遠くの青い海をながめて
あったかいやさしいピンクで仲直りしよう

今日も楽しかったな
明日もワクワクするなって思う　夕焼け色の
オレンジ

真っ暗な夜
失敗したことを思い出したり
もう何もできないと思ったりするけれど

黒の中にはたくさんの星
きらきらかがやく希望の色

色んな気持ちが心にはある
どんな色もかけがえのない
大切な大切な私の気持ち

短評　優秀賞「気持ちは何色？」

私たちの気持ちは、うれしかったり、悲しかったり、怒ったりといつもゆれ動いていますね。それをつぎつぎに変わる色に見ているなんてすばらしい。黄色を見ると元気になる。緑色はさわやかな気持ち。いろんな色がまじりあって複雑な気持ち。黒色はさけたい色だとだれもが思うかもしれないけど、葵陽さんは、そこにかがやく星たちの光に希望を見つめているのですね。とても感動しました。

優秀賞

青い雨

上山川小学校　六年　佐藤　りく

夏の日に雨たちが降っている
気づくとやんでる雨たちは
きっとねちゃった雨たちは
次の日は空は真っ青いい天気
あじさいは青く輝いている
よく見ると葉の上に雨つぶが乗っている
雨つぶはぐっすりねている

その雨つぶは何かちがう
降った時はとうめいで
今は青く見えている
とってもとっても不思議だな
でもワクワクするのは何故だろう

短評　優秀賞「青い雨」

りくさんの眼と感覚で、雨をしっかりと見ているので、良い詩になりました。まず、雨をひとくくりにしないで、〈雨たち〉と見ていること。その時、〈雨つぶ〉のひとつぶ、ひとつぶが現れるのですね。それは生き物のように眠っている。降った時と今の色のちがいも見えてくる。まるですべてが生まれて初めて見たように新鮮な世界だ。不思議だ。でもこころがワクワクするのですね。物を見る素晴らしさを教えてくれる詩でした。

優秀賞

夏の朝

結城南中学校　二年　河合　音杷

夏の朝日
すやすやと眠る姉と私
隣にベッド
それを見てほほえむ母
記憶とデジカメに長期保存
アラーム鳴り響き慌てる母
そんな母の様子を寝ぼけながら
見届ける
うっすら笑う
姉と私
この日常もうっすらと消える
私達の記憶
隣は空白
思い出す日

短評　優秀賞「夏の朝」

不思議で魅力的な詩。眠る姉と私。隣にベッド。ほほえむ母。美しい絵のような光景は、記憶の中のようであり写真のようでもある。でもこの三人を見ているのは誰だろう。慌てる母とうっすら笑う姉と私は、すぐ後の出来事か、それとも別の朝の出来事か。そのようなすべての境界が溶け合っている懐かしい記憶。私だけの記憶ではなく、私達の記憶。それも消えて空白になる。日常の記憶はこのようなものなのですね。よく捉えて、すばらしい詩として生き生きと表現しました。これからも詩を書き続けて下さい。

優秀賞

「夏の教室」

結城中学校　三年　佐藤　理生

プールの後の教室。
とても静かで
少し塩素のにおいと
窓からの生ぬるい風。
せんぷうきの音と
先生の声。
寝てしまう人もいるし、
頑張ってノートを書く人もいる。
夏とは思えない静けさと雰囲気が
私は好きだ。

短評　優秀賞「夏の教室」

遠い昔にあったような、あるいは昨日のことであったような、実際はなかったような、やっぱり確かにあったような、そのようなけだるい教室の出来事。プールの消毒の塩素のにおいは、風向きによって、おそらく前の席の女子生徒のまだ濡れている髪からも微かにおってきたのかもしれないね。鉛筆の音にまじって、かすかな寝息も聞こえてくる。夢の中から聞こえてくるような先生ののんびりとした講義。私もそのような一瞬がとても好きだ。

優秀賞

日常

結城中学校　三年　塚田　来留美

地球はまわってまわってまたもどる。
公園の菜の花が優しく咲く。
新緑の葉が風に揺れる。
金木犀の香りが漂う。
降り積もった雪の冷たさを感じる。
地球はまわってまわってまたもどる。
早朝、清々しい空気が流れる。
太陽がさんさんと輝く。
肌寒い浜辺を夕焼けが包む。
暗い夜を満月が静かに照らす。
地球はまわってまわってまたもどる。
いつもの交差点の信号が青に変わる。
小鳥が赤い実を運ぶ。
ラベンダー色の花びらがゆっくり舞い落ちる。
雨が止んだばかりの空に虹色の橋がかかる。
普段の日々にいくつの奇跡があるだろう。
地球は今日もまわってまわってまたもどる。

短評　優秀賞「日常」

初めの連は春夏秋冬の公園の自然の変化。次は海辺の朝、昼、夕べ、夜の変化。最後の連は都会の片隅の一日のささやかな出来事。それとは無関係に地球は永遠に回り続けるというリフレイン。しかし、そのように回っている地球の上で、生命や自然は驚くような美しさで、一刻一刻変化しつつ存在している。それは奇跡だと来留美さんは深く感動する。確かに、その奇跡がなければ、地球はただの岩や金属のかたまりなのですね。

優秀賞

タンポポ香水になってみたい

結城東中学校　三年　ヤスミン　シタンガン

私は、香水になってみたい。
嗅いだ時に、優しい甘い香りが心と体を包み
込み平和を感じさせるような香水。
嗅いだ時に、微(かす)かな幸せと喜び、安心を感じ
させるような香水。
タンポポのつぼみが少しづつ「ぱあっ」と開
く瞬間をカメラ一枚にとめたストーリーを
感じさせたい。
月が綺麗な夜に木の下でこの香水を嗅いで不
安や悲しみを忘れて見えている風景に黄昏(たそがれ)てほしい。
私は、香水になってみたい。
タンポポの香水になってみたい。
木、虫、人、動物、大自然も使えるような
香水になってみたい。
タンポポの小さな綿毛が大空へ飛んで行き、
微(かす)かな勇気と感動を与えられる香水になって
みたい。

短評　優秀賞「タンポポ香水になってみたい」

タンポポの香りの香水。その香りに包まれると、蕾がぱあっと開くように心が解き放たれ、白い綿帽子が大空へ飛んで行くような自由と勇気を感じ、すべての生き物も自然も平和で心安らかになり、不安や悲しみを忘れる。そのような香水の庭園のような場所を、ヤスミンさんは、とぎ澄まされた感性と豊かな想像力で、理想の世界を瞑想しながら散策しているような詩ですね。

優秀賞

再開

結城第二高等学校　一年　永盛　愛音

まっ白の世界に　息をする音が響く
刻々と変化する　冬の朝の陽
木々の影が伸びて　静寂の中
時がゆっくりと流れる
窓ガラスに　繊細な柄を描く霜
息を吸いこんで　その美しさを眺める
冬の朝は　物語を語り始める
太陽が世界を照らして
雪に覆われた　大地が輝きだす
鳥たちのさえずりが　静けさを破る
新しいページをめくる
冬の朝

短評　優秀賞「再開」

言葉を正確に使い、変化する冬の朝の風景の一刻一刻を端正に描写していますね。素晴らしい。雪の朝、〈息をする音〉は、三行後の〈静寂〉によって、風景全体の静寂に広がり、伸びる木々の影が静かな時間の流れを形象化し、美しい窓ガラスの霜に、冬の寒さ全体が凝集していく。そこまでは沈黙の世界。太陽が昇ると、世界は物語を語り始める。このように見事な構成で読者を引きつけていきます。これからも詩を書き続けて下さい。

優良賞

なつのおはな

結城西小学校　一年　平山　新菜

はっぱがまるで
いぬみたい
つるがまるで
へびみたい
つぼみがまるで
チューリップみたい
あたらしいはっぱがかさなって
まるでわたしのおようふくみたい
あついなつ
やっとおはながさいたよ
それはまるでせんぷうきみたい
さて　このおはなはなんでしょう？

優良賞

すいかがわれた

城南小学校　一年　柏瀬　将吾

ぐるぐる　ぐるぐる
めのまえがまっくらだ
ぐるぐる　ぐるぐる
めがまわる
「まえ！まえ！まえ！」
まっすぐあるいてもあしがふらふらする
「もっとみぎ！」
「いっぽひだり！」
「とまって！」
みんなのこえをきいて
ぼくはてにもっているぼうを
おもいっきりふりおろした
ばっちーーん
あたったしんどうでてがしびれる
すいかはまだわれていない
もういっかいふりおろした
すいかのしるがぼくのかおにとんだ
めかくしをはずしたら
おいしそうにわれているすいかがあった
みんなでたべたらとってもおいしかった
またすいかわりやりたいな！

優良賞

おならくん

絹川小学校　二年　小松　咲輝

大きいおなら　おにいちゃんのおなら
すっごく大きい音
くさいおなら　パパのおなら
すっごくくさいにおい
ふしぎなおなら　ママのおなら
音はするけど　においがしない
おかしなおなら　おばあちゃんのおなら
おもしろい音がする
あわのおなら　おじいちゃんのおなら
うたっているみたい
かわいいおなら　わたしのおなら
小さい音で
においがしない

優良賞

ぎっくりごしになったまま

山川小学校　二年　渡邊　羽奏

ふつうにあるけなくなったまま
たこのような
たかあしがにのような
いかのような
かめのような
なんだかわからない生きもののようだ
たまにギャ！と声をだし
かおはあおおに
だからわらっちゃう
ぎっくりごしってなんだろう
わからないけどなりたくないなぁ

優良賞

ないしょは、ないしょ

城西小学校　二年　上野　翔大

お父さんから
チョコレートをもらった
「お母さんには　ないしょなっ!!」
小さい声で
「シーッないしょないしょ」と、
食べてたら
お母さんが
「なにが、ないしょなの?」と聞いてきた
ぼくは、
「チョコレートをたべたなんてないしょだよ」と言った
お母さんがわらいながら
「お口になにかついてるよ?」って
お口についたチョコレートをゆびでとって
ぼくはまた、食べた
お父さんもぼくを見てわらってる
ないしょだもんね!!
ごちそうさまでした。

優良賞

サンダル

上山川小学校　三年　箱守　結仁

ぼくのお気に入りのサンダル
かっこいいキャラクターのサンダル
４才のころからはいている
すぽっと足が入ってはきやすい
すなが入らなくてとってもいい
夏でも冬でもはいている
おでかけのときでも
ちょっとそのへんにいくときも
ボロボロになってもお気に入り
だけど
９才になったら足が半分しか入らない
とうとうおわかれだ
新しく買ってもらったサンダルもいいけど
今でもくつばこに大切にしまってある
あの赤いサンダルがやっぱりいいなぁ

優良賞

写真にうつっていたのは

結城西小学校　三年　大野　月冴

アルバムひらいて
見てみたら
おなかの大きな
ママの写真

アルバムめくって
見てみたら
小さな赤ちゃんだっこする
ママの写真

アルバムめくって
見てみたら
男の子と手をつなぐ
ママの写真

アルバムめくって
見てみたら
笑顔ばかりの
男の子

ママの写真かと思ったら
ぼくの成長きろくなんだって
笑顔いっぱいのぼくは
幸せいっぱい大きくなるよ

優良賞

オレの毎日

結城小学校　四年　古川　颯祐

オレ全部うまくいかないし
わかる？
オレすぐねむくなってしまうし、
あそびつかれてしまうんだよ。
オレは自分にあますぎるとおもうし
よていを立ててもできないし
すごくなきむし
んーごめん。
オレは、おこられるとき、いっしゅん。
オレはただおこられるために
生まれてきたんじゃないかとおもいます。
そしてオレががんばってたいへんなとき、
ずっとわらっているのをきくと
ばかにされているんじゃないかと
おもいます
でもおもってるからほんとかどうかがわからない
そんな、オレの毎日

優良賞

ひまわりのおいのり

結城小学校　四年　吉田　悠真

ぼくの家にはひまわりがさいている
ひまわりはすごい
朝から夕方までずっと太陽の方を見てるから
ぼくだったらまぶしくて
たった一秒見るのだってむずかしいのに
どうしてあんなに太陽を見ているのだろう
ある日ぼくが学校から帰ってくると
ひまわりの顔が少し下を向いていた
それを見たとき
理由が分かった気がした
お母さんは
「暑くて元気がないのかな」
て言ったけれどそうじゃない
きっとひまわりは
太陽においのりをしていたんだ
また明日も光をあびれるように
空に向かってまっすぐ大きくなれるように
ぼくもひまわりみたいに大きくなれるかな

優良賞

みそおむすび

江川北小学校　四年　岩﨑　匠

ぼくのすきなおむすび
形もいびつで
米もごくふ通のコシヒカリ
のりもまいてあるわけじゃない
でも、ぼくにとっては、おいしいおむすび
おむすびのかたさといい
みそのまんべんなくついてる所といい

たまに
お父さんが、ぼくのごはんちゃわんに
ラップを、ひきごはんをよそい
ラップごと、にぎりながら
みそを、うすくもなく、こくもなく
ていねいに、にぎられたおむすびが
どこのコンビニのおむすびより
お父さんのおむすびが
ぼくは、だいすきだ

優良賞

ぼくの大好きなご飯

上山川小学校　四年　岩田　大河

ぼくはご飯が大好きです
ぼくの家ではお米を作ってるよ
３月になると、田んぼの土をトラクターで
やわらかくするよ
苗を育てるビニールハウスを作るよ
苗になるお米の赤ちゃんを水のお風呂へ入
れるよ
４月になると、苗になるお米の赤ちゃんを
ふかふかの土のベッドに入れるよ
たくさん水をあげて、ビニールハウスのあ
たたかい部屋で育っていくよ
田んぼには水がたくさん入ってきて、どろ
んこの大きなプールができるよ
５月になると、すくすくと育った苗をどろ
んこの大きなプールに田うえするよ
田うえきでうえると、キレイな緑のじゅう
たんができるよ
８月になると、苗に小さい白い花がさくよ
花がお米の実に変わるよ
暑さや雨や風にも負けずに育っていくよ
９月になると、緑のじゅうたんが黄色のじゅ
うたんに変わるよ
黄色はおいしいお米ができた合図だよ
コンバインに乗っていねかりをするよ
１０月になると、おいしい新米が食べれるよ
新米は甘くてキラキラしてるよ
今年も早く新米が食べたいな
ぼくはやっぱりご飯が大好きです

優良賞

パソコンってすごいな

江川北小学校　五年　稲葉　翔海

ママは言う
パソコンってすごいよね
調べたいものがすぐ分かっちゃうんだから
人間には出来ないすばやさ
ぼくもそんな頭になりたいな
ママは言う
昔はね自分で書いて書いて書くのが勉強
書いてると手が覚えているんだよ
ぼくは書くよりパソコンが好き
ママは言う
自然っていいね
鳥の声　車の音　風の音
何よりうれしいのは
ぼくたちの笑い声だって
パソコンの中にはない世界
これからぼくも見つけていきたいな

優良賞

フリースロー

江川南小学校　五年　一ツ木　琉生

ぼくは今、大ピンチだ
試合時間残り二秒
ぼくがフリースローを決めれば逆転勝ちだ
会場の歓声が「外せ！」に聞こえる
怖くてドキドキが止まらない
集中しなくちゃいけないのに、余計なことを
考えてしまう
外したら負けてしまう
フリースローラインから見るリングは、いつ
もより高く遠くに感じる
手の汗をユニフォームでふいて、ボールを受
け取る
「だめだ、自信ないよ」
そう思った時、仲間の声が聞こえた
「大丈夫、いつも通り」
いつも通り…あんなに練習したんだ、絶対大
丈夫
ぼくはいつも通り、その場でボールを二回ド
リブルした
フーっと大きく息をはいて、リングに向かっ
て円をかくようにシュートを打った
ボールは、パスッとゴールに入った
「やったー」ぼくが大きくガッツポーズする
と、仲間のみんなも同じようにガッツポーズ
をして喜んでくれた
ドキドキして怖かったけど、
自分を信じてよかった
だからバスケットは最高に面白い

優良賞

地球温だん化

山川小学校　五年　矢口　紗希

外に出よう　あついあつい
太陽メラメラ　あついあつい
地面ギラギラ　あついあつい
水道水もお湯で　あついあつい
砂も土もあったまって　あついあつい
日陰もじめじめ　あついあつい
犬もゼエゼエ　あついあつい
夏の外はどこに行っても　あついあつい
家の中に入ろう　あついあつい
どあも太陽で　あついあつい
外よりげんかん　あついあつい
リビングにあったまった熱　あついあつい
おふろ場むしむし　あついあつい
いすもつくえも　あついあつい
階段のかべも　あついあつい
夏の家も外もどこに行ってもあついあつい

これ全部地球温だん化？

優良賞

太陽の体調管理

城西小学校　五年　稲葉　琥珀

夏はとても暑いのはなぜだろう。
太陽が暑いのはなぜだろう。
太陽もお熱があるのかな。
人も調子が悪いと熱がでる。
太陽も同じなのかな。
太陽に悪いものを人がつくっているのかな。
たくさんのゴミだったり、車のはい気ガスだったり。
太陽も自分のことを守ろうとしているのかな。
熱をだしてアピールしているのかな。
かん境を大切にしてって言っているのかな。
そうだ。ぼくたちが太陽を治してあげよう。
ものを大切につかったり、食べ物を全部食べたり、木を大切にしたり、ぼくたちができることをやってみよう。

優良賞

ミニが教えてくれたこと

城西小学校　五年　坂本　悠真

さく年の夏、初めて金魚すくいをした。
「生き物をかっちゃだめ。」
お祭りのたびママがこまった顔をする。
けれど今日はママがいない、大チャンス。
お店のおじちゃんからポイをわたされ
しんちょうに金魚を追いかけた。
速い、角に追い込んだ、よし、今だ。
オレンジ色の金魚が紙の上ではねている。
わたしにも取れるじゃん。
四ひき入ったふくろをぶらさげ
得意げに帰った。
ママはびっくりしていたけれど
かう事をゆるしてくれた。
オレンジ色の金魚が三びき、黒が一ぴき。
毎日のエサやりはわたしの当番。
水かえのお手伝いもする。
妹はニヤニヤして水そうにはりつく。
　ある日、一番小さいミニの様子がおかしい。
まっすぐおよげない。
水そうの底でじっとしている。
パパがペットショップで相談したり、
ママがネットで調べる。
出来る事が見つからないまま
ミニは死んでしまった。
次の日、みんなでお別れをした。
悲しい。さびしい。こういう事か。
ママの言葉をふと思い出した。

優良賞

夏の袋井に

結城中学校　一年　山﨑　優

海の音が聞こえる
　夏の袋井に
風鈴の音を聞きながら
　涼んでいる祖父母がいる
夏の袋井に
　陽気な連中組
三人のいとこが
　ふざけてケガをしている

　夏の袋井に―

優良賞

ツバメの巣

結城南中学校　一年　生沼　友羽

家の屋根の下に
ツバメが巣を作り始めた
少しずつ少しずつ土を運んで
見る見るうちに巣が完成
いつの間にかピーピー聞こえる鳴声に
あわてて見に行くと
黄色い口ばし並んでた
四さい下の弟が大興ふん
ビー玉みたいなおめめで
「ねーね。四ひきいたよ。」って
小さな手で表わす
四の手が可愛いくて
それから毎日何度も見に行って
お母さん鳥がエサを運んで
すくすく育っていくひなたちを
おどろかせないように
そぉーっとそぉーっと
見に行く姿がたまらない
大雨や雷の時は家族で無事をいのり
あっというまに巣立ちの時
「がんばれ。
　向こうでお母さんが待ってるよ。」って
小さなおうえん団のおかげで
はばたいていったね
家のかべは汚れちゃったけど
忘れられない夏の思い出
ありがとう

優良賞

ボタン

茨城県立古河中等教育学校　一年　青島　優花

目の前にあるひとつのボタン
押したほうがよい
でも　なんだか押せない
そっと近づくと
ボタンは　瞬く間に消えてしまった
また来るのを待つしかない

目の前にあるひとつのボタン
今度は押さないほうがよい
でも　押してしまう
ダメだとわかっているのに
どうしても連打してしまう
泣きながら押し続ける
次の瞬間　ボタンは消えた

私は毎日　これを繰り返している

優良賞

四つ葉、それは私のあこがれの花

結城中学校　二年　工藤　愛梨

私はたまに四つ葉をさがす
四つ葉のでき方をほぼみんな知らない
四つ葉は成長期に傷をおってできるらしい
幸せの花、といわれている四つ葉が
昔は傷をおいながら一生けんめいに生きていたと思うと
私は四つ葉にとてもそんけいする
今私達が生きている中学生時代は
四つ葉でいう、成長期だ
過去も今もこれからも
たくさんの苦労、傷をおっていくと思う
それでもあきらめず一生けんめい生きてればいつか四つ葉みたいにすてきで幸せな花になると、
私はそう信じて生きている
四つ葉、
それは私のあこがれの花

優良賞

中途半端

結城中学校　二年　武田　大和

僕は消しゴム
初めてこの透明な目隠しをはずした
頭の角をこすられて
こすられて
ある日
僕の体は半分の大きさになっていた。
僕が着ていた服も無くなっていた
そしたら僕の頭をこするやつが目の前に来て
僕に似たやつを持ってきて
同じように透明な目隠しをはずして
同じようにそいつの頭をこすり始めた。
その後僕は暗い所に閉じこめられて
二度と出れなかった。
回りを見ると
僕と同じ姿のやつがたくさん居た。

優良賞

人生で最高なプレゼント

結城南中学校　二年　大島　彩可

「一本。そこまで」審判の声
会場に響く歓声
安心した顔をしているメンバー
喜んでる一年生
嬉し泣きしている皆の保護者
笑顔の顧問
ラスト2秒のタイマー
拍手をしている結城市内の柔道部の仲間
何が起きたか理解していない私
「私が言ったことを表してくれてありがとう」
と言った校長先生
「日々の練習がやくだったな」と言っている副顧問
赤い線の前に立ちお辞儀
分からないが嬉し泣きする私
それをなぐさめるメンバー
気になっていた先輩が「おめでとう」といい抱き
しめてくれた
数ヵ月前の話
今では、奇跡だと思う
それが私の生まれた七月五日十二時三分に
大会で起きた人生で一度しかない最高なプレゼント。

優良賞

気がする

結城東中学校　二年　飯田　瑠鈴

水の入ったコップを見ていると
自分が水の中に入ったような気がする。
私が歌を歌っていると
小鳥が輪唱しているような気がする。
分からないけど私の心の中では
誰かが何かをしてるような気がする。

稲妻を見ていると
龍が舞い降りている気がする。
空を見上げていると
天使が誰かを天国へ案内してる気がする。
分からないけど私の目では
神様の使いが見えてる気がする。

優良賞

影

結城東中学校　二年　渡邉　更咲

私はあの子の影
あの子のうしろにくっついてる。
あの子のうしろで
笑って
驚いて
笑顔の仮面を被る

でも、
自由に羽を広げた鳥をみると
胸がくるしく、切なくなる。

私はあの子の影
それでいいのか
私の人生は
やっぱり
私のものだ

優良賞

花壇

結城南中学校　三年　矢口　成也

道の途中に花壇がある
そこには何時の日も
色とりどりの花が咲いている
チューリップや
サルビアや
コスモスや
ツバキや
季節に合わせてつぼみを開き
隣の花に当たらぬように
開いた花を閉じている
時に他の花が枯れたら
私を見てと言わんばかりに
目いっぱいに花を咲かせている
そうやって足りない分を補いながら
花壇は今日も成り立っている
それは、まるで私たちみたいに
人と人とが気づかいながら
それぞれが生きている
誰かが困っていれば手を差しのべ
足りないものを誰かが代わる
私たちのそんな毎日が
花壇に咲く花のように感じるのだ
今日も花は咲いている
花壇という世界の中で
私たちの美しい毎日のように

優良賞

「普通」ってなんだろう

結城東中学校　三年　塩野　心音

私が中学一年生の十月。
お姉ちゃんに子供が産まれた
年齢にしては早いできごとだった
多くの反対の声があげられた
「普通は・・・」
という声もあった

「普通」ってなんだろう。
みんながいう「普通」って？
どうして「普通」なんていうんだろう。

「普通」なんてことばあってはいけないよ
「普通」ということばで
だれかが傷つくかもしれないよ
だれかがいやな気持ちになるかもしれないよ
でも、どこかでうれしくなっている子が
いるかもしれないね。
「普通」ってむずかしい
「普通」ってなんだろう。
答えはないのかもね

優良賞

青空の無限回廊

茨城県立結城第二高等学校　一年　萩原　煌天

無限に広がる青空の回廊に踏み入れるたび
時間も空間も溶けていく。
外に出ると必ず踏み入れ、青空はどこまでも続いていく。
外で遊んでいる時、外で犬の散歩をしている時、外で運動している時、どんな時でもどんな場所でも無限に続き、全てを見下ろしている。
青空は全てを知っている、それが誕生した瞬間からのそこで起こったありとあらゆる全ての歴史を知っている。
青空はどんなに泣いたり、落ち込んだり、怒っていたりしている時でも踏み入れるだけでオブラートのように包み込んで時間とともに忘れさせてくれる。
透き通るように青くどこまでも広々としている空がそこにはある。
そう、まさに青空の無限回廊のように。

優良賞

ワガママな花束

成美学園小山校　一年　陣野　未徠

私は恋をした　液晶の中の貴方に
太陽のようにあたたかな声と
月夜に漂う金木犀を　今も鮮明に感じる
私は人を信じること、好きになることが
怖かった
利用されて、役に立たなければ
皆離れていく
それを貴方が変えてくれた
信じる心　友情の大切さ　声のすばらしさ
全て貴方に教えられた
もしも貴方に気持ちを伝えられる
そんな日があるなら
私は秋で雨の降る日を選ぶ
私　雨は好きよ
もし貴方にフラれたなら
雨が私を助けてくれる
雨が私の涙を隠してくれるでしょう
それに雨なら金木犀の花を落としてくれる
貴方が私にかけた魔法も解ける
可憐な薔薇のようで　月下美人のように
儚い想いだけれど　その仮面の裏は
夾竹桃のように　互いに触れてはいけない
少しでも貴方に触れてしまえば
消えない傷を与えてしまう
いつの日か貴方に会えるなら
そっと一歩　後ろに下がって　見ていたい
今日も貴方は　金木犀
その魔法は貴方に利くのだろうか

優良賞

本当の意味

茨城県立結城第二高等学校　二年　稲見　日向

なぜだろう
朝の月曜日はすごく眠い
耳元から聞こえる母の声
目が覚めてゆっくりと準備する
チャイムの音と同時に教室へ入る
なぜだろう
悲しくもないのに涙が出るのは
テストが赤点だったわけでも
失恋したわけでもないのに
友達と笑って話していても
涙が出てくる
好きな人に思いを伝えた
また次の日ゆっくりと涙を流した
友達の前では思いっきり涙が出るのに
好きな人に思いを伝えたあの日は
誰にも見せることが出来なかった
同じ涙でも見せる事の出来ない涙がある
なぜだろう

―新川和江賞～未来をひらく詩のコンクール～について―

［目　　的］ 結城市出身の詩人新川和江氏による「詩」の創作活動の指導を通じて、結城市の文芸振興を図るとともに、積極的に未来に向かう創造性豊かな青少年の育成に寄与する。

［募集作品］ 自由題の未発表詩

［応募資格］ 結城市在住、在学の小・中・高校生

［選　　考］ 選考委員長　新川和江（第１回～第 10 回）
武子和幸（第 11 回～）（一社）日本詩人クラブ元会長
茨城文芸協会会長
選考委員　関 和代・山中 和江（センダンの木の集い）

［経　　過］

平成 16 年度（2004）　新川和江選「未来をひらく詩のコンクール」開催
(結城市制 50 周年記念及びゆうき図書館開館記念事業)
●募集作品：「私（わたくし）が大人になったら」・「私（わたくし）のふるさと」のいずれかを題材とする
●応募資格：結城市及び隣接市町村在住の小・中・高校生
●最優秀賞：「わたしのふるさと」
児矢野 千穂（三和町立大和田小学校２年）

平成 20 年度（2008）　第１回「新川和江賞～未来をひらく詩のコンクール～」開催
(結城市民情報センター・ゆうき図書館開館５周年記念事業)
●新川和江賞：「あまいみをならしてね」　海老澤 匡希（山川小学校２年）

平成 21 年度（2009）　第２回「新川和江賞～未来をひらく詩のコンクール～」開催
●新川和江賞：「夏」　向田　浩哉（結城小学校５年）

平成 22 年度（2010）　第３回「新川和江賞～未来をひらく詩のコンクール～」開催
●新川和江賞：「ランドセル」　野呂瀬　早紀（結城小学校１年）

平成 23 年度（2011）　第４回「新川和江賞～未来をひらく詩のコンクール～」開催
●新川和江賞：「石」　藤野　里菜（結城東中学校２年）

平成 24 年度（2012）　第５回「新川和江賞～未来をひらく詩のコンクール～」開催
●新川和江賞：「日記詩（にっきうた）」　海老澤　朋代（結城南中学校１年）

平成 24 年度（2012）　「新川和江賞～未来をひらく詩のコンクール～」５周年記念誌発行

平成 25 年度（2013）　第６回「新川和江賞～未来をひらく詩のコンクール～」開催
●新川和江賞：「変わらない日々」　宮田　和佳奈（結城東中学校２年）

平成 26 年度（2014）　第７回「新川和江賞～未来をひらく詩のコンクール～」開催
●新川和江賞：「やさい」　永田　美穏（山川小学校２年）

平成 27 年度（2015）　第８回「新川和江賞～未来をひらく詩のコンクール～」開催
●新川和江賞：「風のふで」　山田　明依（城南小学校３年）

平成２８年度（2016）　第９回「新川和江賞～未来をひらく詩のコンクール～」開催
●新川和江賞：「河原の石」　浅利　直弥（結城小学校６年）

平成２９年度（2017）　第１０回「新川和江賞～未来をひらく詩のコンクール～」開催
●新川和江賞：「伝統の田植え」　須藤　啓太（城西小学校５年）

平成 29 年度（2017）　「新川和江賞～未来をひらく詩のコンクール～」10 周年記念誌発行

平成 30 年度（2018）　第１１回「新川和江賞～未来をひらく詩のコンクール～」開催
●新川和江賞：「あっ来た。ヤモリ」　永井　心海（山川小学校２年）

令和 元 年度（2019）　第１２回「新川和江賞～未来をひらく詩のコンクール～」開催
●新川和江賞：「おばあちゃん家」　湯本　有紗（結城南中学校２年）

令和 2 年度（2020）　第１３回「新川和江賞～未来をひらく詩のコンクール～」開催
●新川和江賞：「いいかおり」　坂本　七海（結城第二高等学校１年）

令和 3 年度（2021）　第１４回「新川和江賞～未来をひらく詩のコンクール～」開催
●新川和江賞：「おばあちゃんの庭」　登坂　悠生（結城西小学校６年）

令和 4 年度（2022）　第１５回「新川和江賞～未来をひらく詩のコンクール～」開催
●新川和江賞：「ぼくとウクライナの一日」 坂入 巧真（絹川小学校４年）

令和 5 年度（2023）　第１６回「新川和江賞～未来をひらく詩のコンクール～」開催
●新川和江賞：「天国に行ったひいばあちゃん」 中山 真希（江川南小学校６年）

令和 6 年度（2024）　第１７回「新川和江賞～未来をひらく詩のコンクール～」開催
●新川和江賞：「かみなりのよるは」 岡田 葵（江川北小学校１年）

―新川和江氏について―

昭和 4 年（1929）	茨城県結城郡絹川村（現結城市）小森に生まれる。
昭和 19 年（1944）	詩人の西条八十氏に師事。
昭和 28 年（1953）	第一詩集『睡り椅子』を出版。代表的な詩集に『ローマの秋・その他』、『ひきわり麦抄』、『星のおしごと』等多数。
昭和 35 年（1960）	『季節の花詩集』で小学館文学賞受賞。
昭和 40 年（1965）	『ローマの秋・その他』で室生犀星詩人賞受賞。
昭和 56 年（1981）	日本現代詩人会理事長就任（～1982）。
昭和 58 年（1983）	女流詩人による季刊詩誌、「現代詩ラ・メール」を創刊。日本現代詩人会会長就任（～1984）。
昭和 59 年（1984）	結城市民栄誉賞受賞。「結城市民の歌」作詞。
昭和 62 年（1987）	『ひきわり麦抄』で現代詩人賞受賞。
平成 4 年（1992）	『星のおしごと』で日本童謡賞受賞。
平成 6 年（1994）	『潮の庭から』で丸山豊記念現代詩賞受賞。
平成 10 年（1998）	児童文化功労賞受賞。『けさの陽に』で詩歌文学館賞受賞。
平成 11 年（1999）	『はたはたと頁がめくれ…』をはじめとする全業績に藤村記念歴程賞受賞。
平成 12 年（2000）	勲四等瑞宝章叙勲。『いつもどこかで』で産経児童出版文化賞ＪＲ賞受賞。
平成 13 年（2001）	結城市名誉市民となる。
平成 16 年（2004）	ゆうき図書館名誉館長就任。
平成 19 年（2007）	『記憶する水』で現代詩花椿賞受賞。
平成 20 年（2008）	『記憶する水』で丸山薫賞受賞。結城市民情報センター及びゆうき図書館開館５周年記念事業として「新川和江賞～未来をひらく詩のコンクール～」を創設。
平成 22 年（2010）	日本現代詩人会名誉会員。
平成 24 年（2012）	石像「野の花」を寄贈。結城紬大使就任。
令和 6 年（2024）	８月 10 日死去。享年 95 歳。

―結城市民の歌―

新川　和江　作詞

1.　おはよう結城 わたしたちの市(まち)
むらさきの筑波のみねから
太陽ののぼる市です
鬼怒川の流れのほとり
千年の昔も今も
娘らがはた織る音の
高らかにひびく市です
名にし負うつむぎのふるさと結城

2.　こんにちは結城 わたしたちの市(まち)
旅びとも歴史をたずねて
おとずれる城下町です
いにしえの文化の上に
あたらしい未来をひらく
ひとびとが心寄せ合い
すこやかに暮す市です
かぎりなく伸びゆくふるさと結城

3.　こんばんは結城 わたしたちの市(まち)
はつ夏はあの道この道
桐の花におう市です
桑の実にくちびる染めて
幼い日あそんだ友が
祭りには胸はずませて
遠くから帰る市です
なつかしい灯ともすふるさと結城

どこかで

新川和江

コップのばらが　ひらきました
ちょうど今
世界のどこかで
子どもが　ふふふ　と笑ったからです

きれいな虹が　かかりました
ちょうど今
世界のどこかで
子どもが　うたを　うたったからです

小鳥が　ぱっと　とび立ちました
ゆれている枝
世界のどこかで
子どもが　いきなり　かけ出したからです

花の名

新川和江

もも
ゆきやなぎ
みつばつつじ―

花の名をいうときには
この春やっと
ひらがなを覚(おぼ)えたちいさな妹が
やわらかな鉛筆(えんぴつ)で
一字書いては
うれしげににっこりするように
わたしは発音(はつおん)するのです
やはり　ひらがなで

えにしだ
こぶし　はなみずき
そして　さくら・・・